

## 「黄金」の語る貨幣

―「貧福論」という「閑談」<sup>むだごと</sup>―

空井伸一

### 一 はじめに

「貧福論」には「黄金の精霊」という変化のものは登場するが、それが語るのは蓄財の効用や心構え、清貧を言挙げして富を賤しむようなものの考え方への批判、世の権勢の移り変わりについての批評などであり、言ってみれば世事に尽きる。これまで幽明処を隔てた者たちの執着や怨念、異界との奇妙な交感を描いてみせた『雨月物語』の締め括りに据えられるにしては、現実味を帯びた異質な一篇である。また、人ならざる存在が知的教訓的な話題を語るという設定自体、当時隆興した談義本の系譜に連なることが指摘され、<sup>①</sup>貧富と善悪は格別であるという一見大胆に思われる物言いも、実は従来から存した発想に連なり、取り立てて新味を問うものではないこ

とが明らかにされている。<sup>②</sup>そうした作の有り様は、祝言をもって締め括るという出版慣行に沿うこともあって、他律的な作柄という印象にもつながる。

一方で、そのようなことを敢えて書いた秋成自身の思念を汲み取り、それを評する観点もある。例えば当代の武士の旧弊な経済観や「えせ仏法」に対する批判意識を認めるもの、<sup>③</sup>それとは逆に、武士らしさを顧みず拝金主義に堕ちたあり方に矛先を向けた諷刺と見るもの、<sup>④</sup>あるいは、人知を越えた測りがたい存在を神に近いものとして見る発想に、後の宣長との論争における対立点や、晩年において顕著になる人生観と通じるものを見、生涯を貫く秋成の思索の一環として本作の意義を測るものもある。<sup>⑤</sup>秋成の書いたものとしてふさわしい作の有り様を解析するものとして、それぞれ聴くべきところがあるだろう。

しかし私の見るところ、「貧福論」という一篇は、そのように既存の枠に収まるようでありながら、微妙に、しかし決定的に食い違うところがあり、それがほころび、裂け目となって、当代の思潮や秋成自身の思いには収まらない、更に言えば、今の私たち自身にも回収しきれない、統御不可能な問題が見えてくる、そのようなテキストであると思われる。既知の素材で作られながら、今まで見たこともないものを見せつける、典拠の加工・操作によって『雨月』各篇がよくしてきたところを、この最終話もやはり踏むのではないか。そのようなあり方を本篇固有の題材に引きつけば、黄金と貨幣の關係に擬えることができるかも知れない。「黄金の精霊」は得々として富貴の「術」を説くけれども、実は彼自身扱いかねる事態がこのテキストには侵入している。しかし、そのことが逆に彼自身の未来をほのめかすことになる。そのような自己言及的な逆説の回路こそ、九つの物語を閉じるにふさわしいと思われるのである。

## 二 「貧福論」の岡左内

陸奥の国蒲生氏郷の家に。岡左内といふ武士あり。禄おもく。誉たかく。丈夫の名を関の東に震ふ。此士いと偏固なる事あり。富貴をねがふ心常の武扁にひとしからず。儉約を宗として家の掟をせしほに。年を疊て富昌へけり。

「貧福論」はこのように岡左内なる人物の人となり語ることに始まる。奇矯かつ奥行きのある興味深い人物として諸書に伝えられ、本篇もそれらを踏まえるものだ。しかしこの冒頭は、そうした類話とは一線を画している。<sup>(6)</sup>

戦国武将として語られる左内の事跡は、松川合戦において政宗を窮地に追い込んだ武勇ぶりであるが、それは氏郷の没後、上杉家に勤めを移した後の出来事である。類話の多くは、これを前提に左内の耳目を集める振る舞いを記述するというかたちを取る。

対して、『老士語録』という写本のみで伝わる山鹿流軍学者の認めた一書は、「奥州会津にて蒲生氏郷の内に岡野左内と云もの有」と、「貧福論」と極めて近い書き出しで始まる。しかしそれに続け、後に「越後」と称したこと、奥州に一城の主となった折に政宗と激突した事を述べ、しかる後に逸事が語られるという運びであり、やはり氏郷家中時代の左内を語るわけではない。また、そこには他の左内伝とは異なる興味深い逸事も含まれているが、それらは「貧福論」に反映されていない。

つまり「貧福論」は、類話においてほぼ語られてこなかった左内の氏郷家中時代に、彼について広く知られた、一般には上杉仕官以降の出来事と目される事跡を組み込んだということになる。これまでにない時代設定を架空したのだ。もちろん「小説のことであるから、時間的なズレがあつたり、自由に潤色されたりしている」のは

当然のことだが、だからこそそのようになされた本作固有の「潤色」の意味を測るべきだろう。先に述べたように、既存の枠にすべてが収まるように見られ、それ故場合によっては凡庸な作とも見られてきたこの一篇なのだが、実はそのようなズレやゆがみあり、それを通じて、『雨月』の他篇が描いてきた、今ここにあると確信でできるようなものとは異なる世界を、やはり垣間見せているように私には思われる。例えば、左内が蒲生を離れて上杉に移ったのは慶長三年とされるが、それ以前のことと属する本篇の時代設定は、後述する「あり得ない小判」と関わることになる。

さて、更に本篇固有の問題を考えるなら、例えばギリシタンであったことや、貸した金の債権を惜しげも無く焼き捨てたことなど、左内にまつわる興味深い逸事のうち取られなかったものが幾つか認められ、逆に他の類話には見えないものが盛り込まれている。本篇の語るところに関わる要点と思われることを三点ほど指摘してみよう。

ひとつは、「茶味翫香を娛します」という設定である。これは従来指摘されるどの類話にも見られない独自の左内像である。それらは当時左内のような階層に共有された風雅な遊びであり、それを通じて情報交換や人脈形成が為される社交術でもあった。そのような嗜みに対して冷淡であることは彼が逸脱した人物であることを印象付けることに働くだろう。利休七哲にも数えられる氏郷の旗下に

あつてはなおさらである。しかし、本篇の語る財宝の問題に照らせば、それだけに止まらぬ意味を持つのではないだろうか。例えば信長の付藻茄子や蘭奢侈の逸話に見るように、茶器や香木は戦国大名にとって黄金や領地にも代わる財物、人心掌握の手立てとして用いられた。それに興味を持たずに黄金を偏愛する左内を描くことは、富と権力について語る本篇において極めて示唆的である。「貧福論」の左内は、名器名香のような由緒来歴、モノにまつわる物語性に依拠した一点物を珍重することで成り立つ芸道には惹かれない。対して金は、金でありさえすればどのような金も金である。秋成後年の戯作『書初機嫌海』にはこんな件がある。

茶人と云もの、秘蔵する道具を見れば。むかしの塩壺物だね入。又はかづらゆひなき山中の桶小桶の用なす物を。二重のふくさづ、み三重の箱。古金欄広東名物のにしき純子にかへ袋してもてはやす事。東山殿このかたの病氣なり。しかれども金銀玉の価はおよそ権衡もてつもらるゝを。この土物のたぐひは其あたひはしられぬが。まことに宝といふべき物ぞと。ある数寄者のいはれたる。これも一理なり。

「権衡<sup>はかりめ</sup>もてつもらるゝ」、左内は、そのように目方のみで決する金の即物的な普遍性にこそ価値を見出す人物である。そして金は、茶

器や香木、良剣など、固有の物語によって価値を帯びる一点物と交換可能な財であり、それにより価値は一元化される。野口武彦は、本篇を論ずるにおいて『資本論』を援用し、そのようにあらゆる商品と交換可能な金のあり方を捉え、「急進的な水平主義者」という喩を引く。<sup>(8)</sup>すなわち、貨幣としての金のあり方である。これは本篇が透かし見せる最も重要な問題であり、本稿もその示唆を受けるが、いささか異なる角度から考察することになる。

次は、広間に黄金を敷き詰めて愛でていた左内が、出来した喧嘩の仲裁に押っ取り刀で駆けつけ、その間黄金は放置したまま顧みなかったという逸話が「貧福論」では語られないことである。黄金愛好を武士にあるまじき賤しさと誇られた左内の汚名を雪ぐ印象的なエピソードであり、類話のほぼ全てがこれを語る。<sup>(9)</sup>対して、「貧福論」では、左内の武将として最大の誉れである政宗との激闘と共に、それにふさわしいこの果敢な振る舞いは捨象されている。冒頭において「誉たかく。丈夫の名を関の東に震ふ」と、その武名が鳴り響いていたことは示されながら、それに関わる具体的な事例は削除されたことになる。「貧福論」の左内は、戦国の世の猛々しさから微妙にずらされるかたちでその人物像が描かれている。

そして最後は、黄金を秘蔵していた「家に久しき男」に対する処遇である。この話も類話のほとんどで語られてきたものだが、そのいずれもが、所持していた以上の金を褒美として与えるというもの

であり、「貧福論」のように「刀をも赦して」ということを語るものはない。<sup>(10)</sup>類話ではこの男を馬取の中間とするものが多く、そのような武家奉公人としてこの男を見るなら、「貧福論」の左内は彼を戦闘要員としての侍に取り立てたということになる。だが、それが彼にとって無前提に喜ばしい褒美であるかは微妙なところだ。作中の時代には、いわゆる刀狩令など兵農分離政策によって身分の固定化が図られたが、士分が誰にとっても憧憬の身分であったという訳ではない。農民が兵となつて土地を離れることを禁ずる一方、逆に中間のような武家奉公人が町人・百姓になることも禁じられている。<sup>(11)</sup>戦国の世において刀を許されるということは戦場で死ぬことも直結する。それを忌避する者がいてもおかしくはない。いわゆる名字帯刀の許しは徳川の治下において成り立つことであり、皮肉なことを言えば、刀が戦闘の具ではなくなった太平の世だからこそ武士の特権としてのそれが名譽の表徴となり得る。ここでも、戦国の世を映すようでありながら、作中の時間は奇妙に後代と交錯している。<sup>(12)</sup>また、黄金の所持が身分を超えさせるといのは、考えてみればかなり大胆なことではないだろうか。「茶味翫香」について、貨幣としての黄金があらゆる価値を一元化することを言ったが、それは更に封建制の根幹を成す身分をも平準化・無化させる可能性としての力を持つということにもなる。それは作中の時間より、むしろ『雨月物語』当代、田沼の時代に近いかも知れない。

このように細部に目を凝らせば、戦国の末に確かに存在した人物の、よく知られた挿話を語るようでありながら、「貧福論」はそれとはどこか異なる、別の時間が流れる世界の出来事を描いているようにも見えてくる。そしてそれは、彼の枕頭に現れた「黄金の精霊」なる奇妙な存在についても言えるのではないか。

### 三 黄金と貨幣の臨界

其夜左内が枕上に人の来たる音しけるに。目さめて見れば。燈臺の下に。ちいさげなる翁の笑をふくみて座れり。左内枕をあげて。こゝに来るは誰。我に粮からんとならば力量の男どもこそ参りつらめ。你がやうの耄たる形してねふりを魔ひつるは。狐狸などのたはむるゝにや。何のおぼえたる術かある。秋の夜の目さましに。そと見せよとて。すこしも騒ぎたる容色なし。翁いふ。かく参りたるは魍魎にあらず人にあらず。君がかしづき給ふ黄金の精霊なり。年来篤くもてなし給ふうれしさに。夜話せんとて推てまいりたるなり。

黄金や銭貨が人の姿を借りて現れるという話は志怪伝奇などに散見し、それを翻案した『伽婢子』『和銅銭』のような先蹤もある。「黄金の精霊」の形象もそれらを踏まえて為される。しかし、見較べてみればそこにもやはり見落とせない差異がある。「貧福論」では自

らの本体を端から明らかにするのに対し、それら先行作においては、例えば金銀の擬人は黄色や白色の衣装を纏い、銭貨の化身である場合には円形方孔を思わせる帽子様のものを被るなどしてその正体をほのめかしはするが、出現したその場では明かさぬまま一旦姿を消し、後日土中から金塊や埋蔵銭が見つかることで判明するという運びである。奇事を語る体のテキストの場合、そのような謎解きのかたちを取ることが話に興味を添える。

これに対し、「貧福論」に極めて近い発想を示すことが指摘される田中友水子『世間銭神論』<sup>(13)</sup>では、変化の者は登場に際して自らの本体である銭貨の来歴について長々と語り、そこで正体を明かす。しかる後、金銭・処世にまつわる談義が展開されることになる。「貧富は天命なり」「銭はもとより無情無心のもの」と言い切ってみせる寸言をはじめ、「貧福論」とかなり通じるものがある。しかしそこにも「貧福論」とは決定的に異なるところがある。そこに登場するのはタイトル通り「銭の精神」なのだ。彼は、金銀に代えて銅で鑄造された銭が貨幣として流通したことで民衆が困窮から救われたことを説く。二十話の結びには全て銭貨の名称が挙げられる。そのような、いわば銭中心主義の談義。金銀を措いて銭の効用を称揚するところは秋成後年の言説にも通じており興味深い。そのような銭称揚の姿勢に対し、「貧福論」の精霊は黄金の靈妙なることを自ら言祝ぐ。作中「銭」の用語はひとつも見えない。この違いは看過されるべきではない。



「黄金の精霊」はこれまでにいかなる存在として理解されてきたのだろうか。従来の注釈を参照すれば、「銭の霊」(岩波日本古典文学大系版)「金貨の霊。お金の精霊」(新潮日本古典集成版)「金銭の霊」(小学館新編日本古典全集版)などと、おおむね銭・貨幣を意味するものとして解している。対して角川日本古典評釈全注釈叢書版『雨月物語評釈』は、「黄金」の精霊だから、物質の精の意ととってよい」と注している。

本文に即せば、精霊は「金は七のたからの最なり」などと誇らしげに語っており、モノ自体に効験や価値のある「金」としての自意識がうかがえる。一方で「且我ともがらは。人の生産につきめぐりて。たのみとする主もさだまらず。こゝにあつまるかとするれば。その主のおこなひによりてたちまちにかしこに走る。水のひくき方にかたふくがごとし。夜に昼にゆきくと休ときなし」とも語っており、その流動的な有り様は貨幣としての属性を意識するものとも見える。先の野口論をはじめ、本篇を貨幣論として読む興味深い論<sup>⑤</sup>があるが、それらはこの流動性に着目する。

黄金か貨幣か。本文ではその両義の含みがあるのに対し、挿絵からは、先行作の描いた銭の精たちと同様、精霊の装いによってある形式がイメージされる。例えば岩波文庫版の挿絵解説では、「精霊の着物の模様は、小判に刻まれた莫塵目と五三桐をデザイン化したもの」としている。

しかし、作中の時制、氏郷家中にある左内という設定からすれば、「黄金の精霊」がそのような「小判」の意匠を纏うことは錯誤である。小判は、徳川幣制によって定められた貨幣であり、関ヶ原合戦の翌年、慶長六年の鑄造を嚆矢とする。それ以前にも駿河墨書小判や武蔵墨書小判のようなブレ小判は存在したが、極めて希少で世に出るようなものではない。甲州金のように金を板状に展延した領国貨幣は従来存在したが、小判という語の用例はほぼ見えない。何よりも「莫塵目と五三桐」を意匠とする小判の鑄造は徳川が実質的に天下を掌握した直後の、その統治を象徴する事業なのだ。従って、「黄金の精霊」の衣装に小判の意匠を見るなら、それは自ら予言するところを象徴的に身に帯びるという、虚構の趣向として理解される。また、徳川のお金、小判は、後述するように計数貨幣である。「両」は本来の重量単位ではなく貨幣単位を意味し、モノとしての貴金属、金の価値から切り離され、いちいち計量せずとも一両は一両で通用する。それを可能としたのが徳川の覇権に他ならない。あり得ない小判の意匠を纏うことで、精霊は自らの拠って立つところを無化する貨幣の時代の幕開けを暗示していることになる。

一方、「莫塵目と五三桐をデザイン化した」黄金は「貧福論」の時代にも存在した。それは秀吉が鑄造させたいわゆる天正大判である。十両と墨書されるが、当然のことながら徳川幣制に言うところの貨幣価値ではなく、重量を示すものである。黄金の茶室の如き示

威的な振る舞いによって天下を圧倒してみせた秀吉が、その権力の源として大坂城内に蓄えた巨大な金塊、分銅金を小分けに吹き替えたものであり、素材自体に意味があるものだ。これは、諸国を流通する貨幣ではない。

大判は徳川の治下においても引き続き鑄造されるが、これも小判とは画然として異なる。褒美や贈答の品として用いられるもので、例えば後年のことだが、秋成自身正親町三条中納言公則から拝領した「黄金十両」というのもこれである。<sup>(16)</sup> 墨書される表書きは擦れて消えやすく、書き直しには手数料を要する、真綿でくるんでしまひ込まれるような重物である。十両という表記も秀吉のそれと同様貨幣価値ではない。それは現今で例えるなら蓄財用に取引される地金型金貨やインゴットの類である。

大判か小判か。考証的に読むなら、「黄金一枚」の秘蔵を賞賛された「家に久しき男」のそれも小判ではない。褒美として与えられる「十両の金」も、徳川の幣制に言うところの貨幣単位ではあり得ない。だが、「貧福論」は虚構の一篇である。歴史的な事柄とは異なる境にあつて、「自由に」時制を混濁させることの意味をむしろ測るべきだろう。私の見るところ、「黄金の精霊」は大判（黄金）でありながら小判（貨幣）をほのめかしていることにこそ意味がある。戦国大名の武威を示すモノとして蓄えられた黄金と、あらゆるモノとの交換をつなぎ、融通無碍に流通する、究極的にはそれ自体

に価値などない方がよい貨幣との、いわば臨界を描くテキストとして「貧福論」を読むことが出来るのではないか。

なぜなら、『雨月物語』の時代こそ、貨幣がモノの呪縛から免れるひとつの画期であつたからだ。

#### 四 『雨月物語』の貨幣―銀で作られた金貨

「貧福論」のしめくくりの最終行には「雨月物語五之巻大尾」と刻され、丁を繰れば、「安永五歳丙申孟夏吉旦」の刊記が目に入る。自序に見る「明和戊子」との八年間の懸隔については、成稿過程などその間の経緯はいまだ不詳で、それを闡明することはこれから難しいかも知れない。しかし、『雨月』という書が、これを明和五年に書き上げたのだという作者自身の記をもつて始まり、安永五年に刊行されたと書肆の記すところをもつて締めくくられる書物であることは明確な事実である。この頃、この書を為した者、そして当時それを読んだ者たちは、時の権力者である田沼意次のもとにおいてなされた先進的な「貨幣」を実見することになる。<sup>(17)</sup>

金銀銭のいわゆる「三貨」が正貨として用いられた徳川の幣制において、銭貨は諸国の隔てなく流通するのに対し、金貨と銀貨は江戸・大坂それぞれを中心とする経済圏に通用が分かれていた。ブロックを越える取引には両替が必須で手数料が発生する。また、金貨は両・分・朱の四進法の単位によって数えられる計数貨幣である

が、銀貨は量目によって取引されるいわゆる秤量貨幣であり、日用の取引にも両替を必要とした。そして金銀銭貨のいずれも素材としての価値、品位に連動して相場立つものであり、金属の、モノとしての価値が裏付けとなる本位貨幣であった。

重商主義的な田沼の経済施策において、そのように障壁のある貨幣のあり方は望ましくない。金銀の隔ては取り払われるべきであり、理想的にはモノの呪縛を免れた名目貨幣であることが望まれる。モノとしての価値が手に取れるかたちとしてそこにあることは感情的な安心にはつながるが、それは貨幣にとって軛でしかない。後述するように、実は貨幣にとって地金の価値に意味などない。それは現在用いられる通貨、紙幣や電子マネーの有り様を見れば知れる。モノに縛られることは貨幣発行、流通量の足かせとなる。それを打開しようと貴金属の含有量を減らす改鑄策を取れば悪貨として忌避され、市場に混乱を招くことになる。そのような感情的な違和をどうやって宥めるか、それが貨幣施策の成否の分かれ目となる。田沼の貨幣は、そのような感情問題の取り扱い事例として見る事が出来る。

『雨月』自序に三年先立つ、明和二年発行の五匁銀は、その名の通り定量化された銀貨であり、秤量貨幣として用いられてきた「銀」の有り様を転換し、計数化された金貨と連動する通用を命じること  
で金銀の垣根を越えることを目論む貨幣であった。田沼の貨幣を立

案実行した川井久敬は、五匁銀が「江戸に限らず田舎筋も重宝成品」であることを目指した。<sup>(18)</sup>しかし五匁銀は市場に受け容れられず、早々に撤退の憂き目を見ることになる。

五匁銀が失敗に終わった理由のひとつは、金貨との交換比率について固定された公定レートが強制されたことにあったとされる。金銀の相場価値にそぐわぬ、モノとしての価値を損なった貨幣に対する反感。しかし、銀の価値と言っても、例えばそれを鑄潰して何に使うというのだろう。煙管の雁首や吸い口、根付といった細工物に用いるのがせいぜいで、それに代替可能な素材はいくらでもあり、日用必需の品などではない。現在のように良導体として用いる当てもない金の非有用性も同様である。黄金色に輝く美麗なだけの金属。秋成は『書初機嫌海』の中でこのことも言い当てている。

又ある理屈者のいはれしは。世に鉄とあかゝねほど益ある物はなし。鏡につくり剣にうつ。鍋かま薬罐毛ぬきはさみ。ことごとく日用のたすけかたじけなき宝也。金銀は鈍物なり。鏡にしてうつらず。剣にうちて切ず。其外何にしてもそれくの用をなさぬを。いかなれば無上のたからとたふとむ事ぞと思へば。その無益無才の鈍物をたふとみて。万事の用をなす物をいやしめてつかふが。むかしくの人のかしこき定めなり。玉と瓦石のくらゐまた同じと。これはそんな工夫でもあるか。さらずと



も又自然の事にてもあるべし。ギャツとうまれてから三才の童も。ひかりあると色よきものには目をつける事しぜんの人情なり。

役立たずの金銀、だからこそそれを価値ある「たから」とするの  
が賢者の知恵なのだと言う。人は、「ひかりあると色よきものには  
目をつける」。見た目こそ肝要、それは貨幣通用の骨法でもあり、  
五匁銀が忌避された理由も実はそこにあった。黒ずんだ色合いは地  
金の粗悪さを思わせ、無様に大きくかさばることが嫌われた。見た  
目や使い勝手で拒否される貨幣。これが正直な庶民感情、貨幣とし  
て成り立つか否かは実のところ感情次第なのだ。

五匁銀は発行から三年後、『雨月』自序の記すところの明和五年  
には実質的に撤収の方向に向かう。対して、この年には寛永通宝四  
文銭という銭貨が発行されている。それはモノとして見れば「益あ  
る物」である銅に亜鉛と錫を混じた真鍮あかがねというまぜものであり、し  
かも一枚で四文に水増しされた典型的な悪貨。しかし、そのような  
不純な合金の、黄金に通じる色合いが好まれ、それを発行した田沼  
政権どころか、幕府が倒れた後さえも通用することになる。貨幣に  
とってモノとしての価値など実は意味がなく、見た目が全てである  
ことを実証する、感情によって受け容れられた貨幣なのだ。

そして更に四年後、明和九年に発行された南鐐二朱判は、モノの

呪縛を免れた通貨として実質的な成功を収めることになる。銀地金  
でありながら、「以南鐐八片換小判一両」と、間接的に金貨の額面  
を刻み込まれた貨幣。南鐐とは精錬された上質の銀を意味し、その  
名の通り約98パーセントの純度を誇る銀貨なのだが、実は量目とし  
ては銀地金の相場を下回っていた。しかし美麗、軽便であることが  
好評を博し、金銀の障壁を乗り越え、以降長きにわたり「田舎筋も  
重宝成品」となる。

黄金と見紛うまぜものの銅、銀で作られた金貨、そのように、美  
麗な装いによって仮構される価値。感情によって流通することを容  
認されたこれら『雨月物語』当代の貨幣について、非情なることを  
嘯く「黄金の精霊」はどのような批評を加えることができるだろう。  
フェイクの黄金に靈泉を湛えるような功德があるとは思えない。し  
かしそれは、諸国をつつがなく渡り歩く財宝たから、正味の黄金より遙か  
に有用な、貨幣となった。戦国末期の武将、岡左内の枕頭に立った  
翁は、既に終わった過去を見てきたような未来として語るけれども、  
『雨月』自序を脱稿時とすれば、本当の意味での未来における金銀  
の成り行き、自らに関わる重大な局面については全く見通せていな  
いのではないか。

## 五 「黄金」の語る貨幣

―「閑談」<sup>ひだごと</sup>としての『雨月物語』

我もと神にあらず仏にあらず。只これ非情なり。非情のものと  
して人の善惡を糺し。それにしたがふべきいはれなし。善を撫  
惡を罪するは。天なり。神なり。仏なり。三ツのものは道なり。  
我ともがらのおよぶべきにあらず。只かれらがつかへ傳く事の  
うや／＼しきにあつまるとしるべし。これ金に靈あれども人と  
こゝろの異なる所なり。

老賢者然として善惡と貧福との格別なることを語ってみせる「黄金の精靈」。しかし、先行研究が明かしたようにそこに取り立てて新味はなく、後年ものされる秋成自身の言説に照らしてもあまりに旧弊な黄金中心主義である。例えば、『雨月』の三年後に刊行された『世間銭神論』の「銭の精神」の見識はゲーム理論やスケールメリットにも及んでおり、「黄金の精靈」の及ぶところではない。「黄金の精靈」は財物の離合と集散しか語らないのに対し、「銭の精神」は循環する「国家第一の潤物」としての貨幣観も披瀝してみせる。

また、『雨月』に一世紀ほど先立つ西鶴の描くところは、貨幣の自律性とそれに振り回される人為の有り様とを既に冷徹に見透かし

ていた。複利の妙味、それと表裏一体に張り付く借錢の恐怖、親の死さえも当て込む戦慄すべき投機の現場、そして何よりも「銀が銀を生む」という資本の機制。それについて立ち入ることは「貧福論」において一切ない。立ち入らないというより、「黄金の精靈」はおそらくそのメカニズムを知らない。彼が説くのは、古典的な素朴実在論に貫かれた儉約と勤勉に基づく金銀蓄財のススメである。秀吉が大坂城内に貯め込んだ分銅金さながらの、モノとしての黄金の有難味を言祝ぐためにまかり出た老翁。もちろん彼は一方でその流動性についても語り、小判の意匠を纏い、貨幣としての相貌をほめかしてもいる。しかし、そこはまだロドスではない。武士が封土から収奪してきた米という実体をタネにしながら、金融という「術」によってそれとは比較にならぬ巨万の富をつかみ取りした札差たちが、武士を武士とも思わぬ浪費を誇示してみせる『雨月物語』の未来からすれば、あまりにも古ぼけた道化、それがこの奇妙なキャラクターの相場ではないだろうか。

しかし、だからこそこの一篇は、黄金と貨幣の臨界を描き、貨幣の未来を望見することを可能とする。金にせよ紙片にせよ、それが貨幣として用いられるのであれば、それはその素材とは一切関わりが無い何物か、すなわち「貨幣」に一変する。徳川の統治を予言する「黄金の精靈」は、自らの纏う意匠に含意された「小判」として流通する自身の未来を予見していることになるが、それは自らの実

質、黄金が意味を失う事態に他ならず、従って、それがいかなる境涯なのか自ら与り知ることはできないし、語ることはできない。自らの喪失について予言しつつ物語から退出すること、貨幣に転換される存在そのものが貨幣の未来を予言する物語として、これ以外の方法はあり得ない。

そしてそのような、自己言及による自己否定を以て自己を語るという回路が、『雨月物語』の締め括りに組み込まれたことはある意味で必然であると私には思われる。

夜既に曙ぬ。別れを給ふべし。こよひの長談<sup>ながものがたり</sup>まことに君が眠りをさまたぐと。起てゆくやうなりしが。かき消て見えずなりにけり。

自ら「非情」と規定する存在が、「いはざるは腹みつれば」と、情動に突き動かされて物語った「十にひとつも益なき閑談<sup>むだごと</sup>」。そのように奇妙に屈折した自己卑下を、私たちは既にどこかで見てこなかっただろうか。

余適鼓腹之閑話 衝口吐出 雉雛龍戰 自以為杜撰 則摘読之者 固当不謂信也 豈可求醜唇平鼻之報哉

太平の世にあつて、誰もまともに取りあうはずのない口からまかせの「閑話」。しかしそこには、自らの身体的欠損を密かに示すことでそのような謙辞を覆す装置が埋め込まれている。言葉では説明の付かないものを言葉で描いてみせることが怪談、幻想小説の骨法であるならば、この「自序」に見る品質保証はそれにふさわしい逆説ぶりである。そして、自ら作り出したものでありながらそれに振り回され従属させられるという、今の私たちにも到底説明不可能な貨幣なる存在の成り立ちを、その自体の自己消失という逆理を以て描いて見せる「貧福論」は、幻想を描出する方法の極北と言える。それは数合わせの凡作どころではない、九つの物語の掉尾に置かれるべくして置かれた一篇なのだ。

#### 注

- (1) 中野三敏「静観坊まで―談義本研究(五)―」、『戯作研究』(中央公論社、一九八一年)所収。
- (2) 小林勇「貧福論」小考、『親和国文』二三号、一九八七年二月。
- (3) 小椋嶺「貧福論」考、『秋成と宣長―近世文学思想論序説』(翰林書房、二〇〇二年)所収。
- (4) 井上泰至「貧福論」の諷刺、『雨月物語論―源泉と主題』(笠間書院、一九九九年)所収。
- (5) 田中則雄「上田秋成と当代思潮―不遇認識と学問観の背景―」(『国語国文』六八三号、一九九一年七月)。
- (6) 本稿において「貧福論」と対照した左内伝の類話は以下の通り。A、Gの並びは概ね成立順。もちろんこれが全てではなく、また、FとGは

『雨月』以降のものであるが、一般に流布していた左内のイメージと「貧福論」との差異を見るため、現在までに指摘されている主なものを比較の対象とした。

A『東国太平記』延宝八年序（通俗日本全史版、国会図書館D Cに拠る）。  
B『武辺咄聞書』延宝八年自跋（和泉古典文庫版に拠る）。  
C『諸家高名記』正徳四年刊（早稲田大学図書館古典籍総合D Bに拠る）。  
D『老士語録』享保一六年自跋、元文元年跋（早稲田大学図書館古典籍総合D Bに拠る）。

E『常山紀談』元文四年刊（有朋堂文庫版に拠る）。

F『翁草』安永五年序（日本随筆大成版に拠る）。

G『続近世崎人伝』寛政五年序、同一〇年刊（中公クラシックス版に拠る）。

(7) 鵜月洋『雨月物語評釈』（角川書店、一九六九年）、中村博保による解説。

(8) 野口武彦『ザインの黄金』、『秋成幻戯』（青土社、一九八九年）所収。野口は貨幣が資本に転化する問題についても言及しており、本稿にとって示唆的である。

(9) Cのみ無し。これは松川合戦を描くもので、金銭エピソード自体が無い。  
(10) A、Cはこの挿話自体が無い。Eでは「黄金百両」を与え、他は「黄金十両」。

(11) 「天正十九年の身分法令では、農民が耕作を放棄して商人・職人になることや、武士団の底辺を構成する侍・中間・小者などが町人・百姓になることを禁じ、さらに大名領主の転封に際し出された法令で、検地帳面に登録された百姓は新しい封地に連れて行くことができないという原則を表明した。」（『国史大辞典』「兵農分離」の項）。

(12) そもそも賤富観に基づく左内への非難自体が後代の発想、創られたイメージかも知れない。戦国の武將は軍資金調達に腐心し、金銀鉞山開発に力を注いだ。彼らは黄金に執着したのである。「黄金の精霊」が嘆いてみせる「弓矢とるますら雄も富貴は国の基なるをわすれ」などというのはむしろ太平の世のことである。

(13) 注（1）中野、注（5）田中が指摘。本稿における『世間銭神論』の引用は通俗経済文庫版（国立国会図書館D C）に拠る。

(14) 『胆大小心録』一四二。「金の性は悪なり」「銭の性は善なり」の寸言で知られる。

(15) 内田保廣「上田秋成の貧富論―「貧福論」をめぐる―」（『江戸文学』一四号、一九九五年五月）、中沢新一「日本文学の大地⑨雨月物語」（『小学館新編日本古典文学全集七八月報二〇、一九九五年』など。今村仁司、岩井克人らの論を踏まえ貨幣観について考察を加える内田論は本稿にとって示唆的である）。

(16) 『胆大小心録』九八。「黄金十両」と言えば大判を意味する。「黄金」一語も狭義では大判を意味する。

(17) 田沼時代の貨幣について述べるにあたって、主に以下のものを参照した。滝沢武雄『日本の貨幣の歴史』（吉川弘文館、一九九六年）。瀧澤武雄・西脇康編『日本史小百科〈貨幣〉』（東京堂出版、一九九九年）。三上隆三『江戸の貨幣物語』（東洋経済新報社、一九九六年）。東野治之『貨幣の日本史』（朝日新聞社、一九九七年）。

(18) 常是役所編『金銀吹替次第（御用留便覧）』『五匁銀』、国立国会図書館D Cに拠る。

## 付記

本稿における『雨月物語』、『書初機嫌海』の本文引用は中央公論社版上田秋成全集に拠る。

本稿における引用部の傍線は空井が付し、傍点は原文通りとした。旧字体などは適宜現行の書体に改め、ルビなどは適宜省略した。

本稿における年の表記は、明治五年以前のものについては和暦、それ以後のものについては西暦で統一する。必要に応じて併記したところがある。